

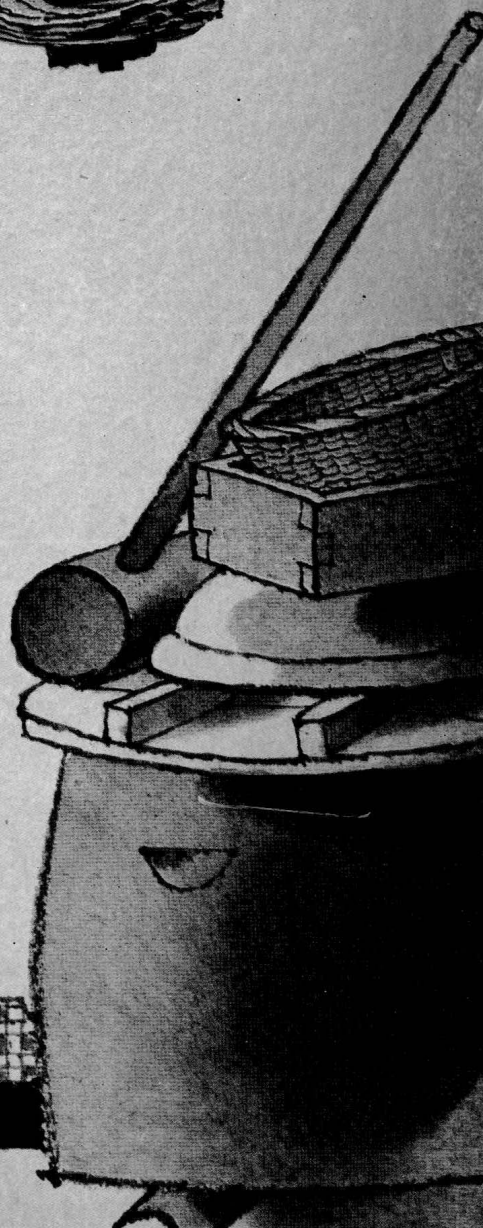
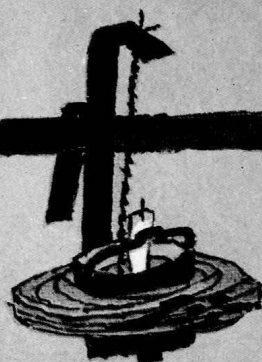
岸 武雄
炭焼きの辰



火の用心

武雄

焼^やきの辰^{たつ}





少年少女／現代創作民話全集 1

炭 焼 き の 辰

N. D. C. 913 偕成社 150. p 22cm 1972年

発行 昭和47年

著 者 きし 岸 たけ 武 お 雄

発行者 今 村 広

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-513010-0904

©岸 武雄 1971

●
辰^{たつ}じい。

炭^{すみ}焼^やきつて、たいへんな仕^し事^{ごと}なんだな。

でも、辰^{たつ}じいはいよくしんぽうして、明^{めい}治^じ・

大^{たい}正^{しょう}・昭^{しょう}和^わと三^{さん}つ^の時^じ代^{だい}を^い生^いき^てき^た。

辰^{たつ}じいは、世^よわたりがへたで、おまけに
が^んこ^で、い^つも^もび^んぽ^うだ^った^な。

でも、おらは辰^{たつ}じいがすきだ。

人^{にん}間^{げん}が正^{しょう}直^{じき}で、心^{こころ}があ^った^かい^もの^の。

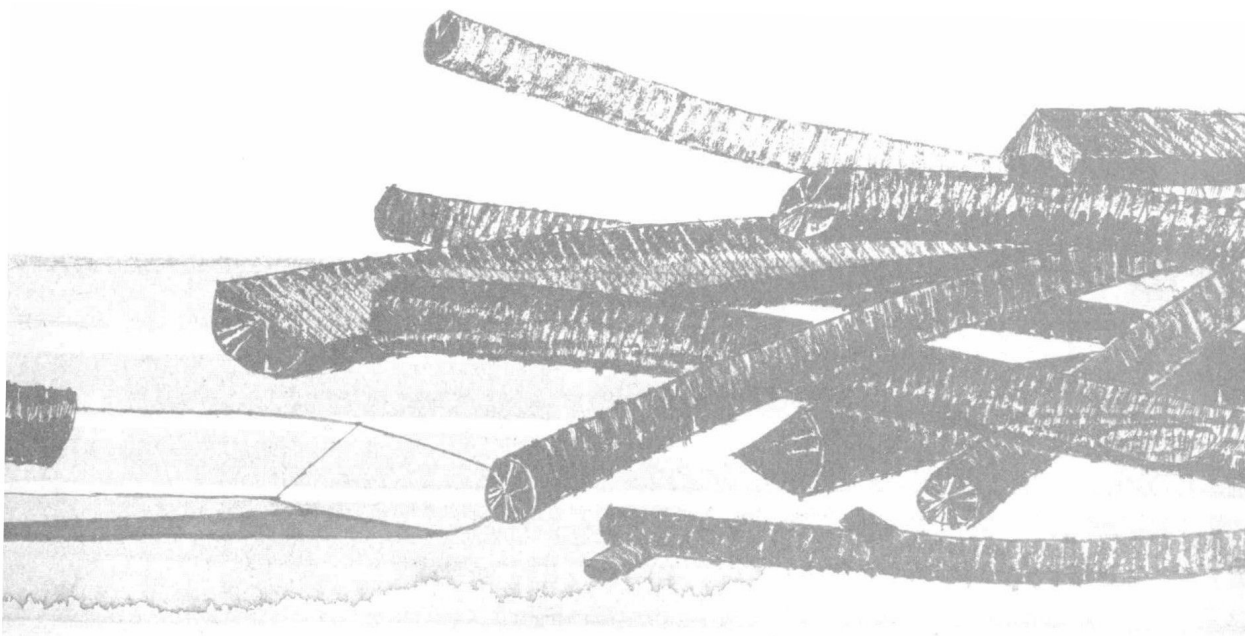
あ^あ、お^おら^が大^おき^くな^った^ら、辰^{たつ}じい^の
よ^うな^人^ひた^がしあ^わせ^にく^らし^てい^ける[、]う^う
つ^くし^い世^よの^なか^をつ^くり^たい[！]

——彦^{ひこ}太^た郎^{ろう}とミ^ミヤ^やより

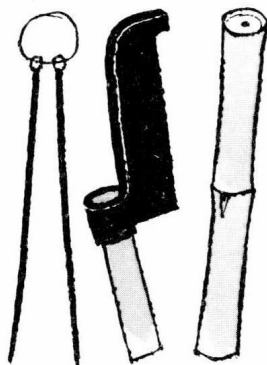


炭^{すみ}焼^やきの辰^{たつ}／もくじ

・ いろりの火 ^ひ ——へはじめに	6
一、コブシの花 ^{はな}	10
二、青 ^{あお} いけむり	26
三、ゆくもの、くるもの	46
四、コンクリートのかべ	61
五、五つの紀州 ^{きしゅう} ミカン	78
六、南 ^{みなみ} 江 ^{こうど} 戸 ^{みず} の水	96
七、電 ^{でん} 気 ^き ごたつ	113
八、こっぱみじんの茶 ^{ちや} わん	124
・ とうげの道 ^{みち} ——へおわりに	148
先生 ^{せんせい} やおかあさん方 ^{がた} へあとがき	148







作者・^{きし たけみ}岸 武雄

1912年，岐阜県に生まれる。岐阜師範卒業後教職に従事し，理在，岐阜大学付属小学校主事。日本児童文学者協会々員。児童文学関係の著書には、『風船学校』『もぐりの公紋さ』『千本松原』等がある。現住所／岐阜市長良光栄町 2－6

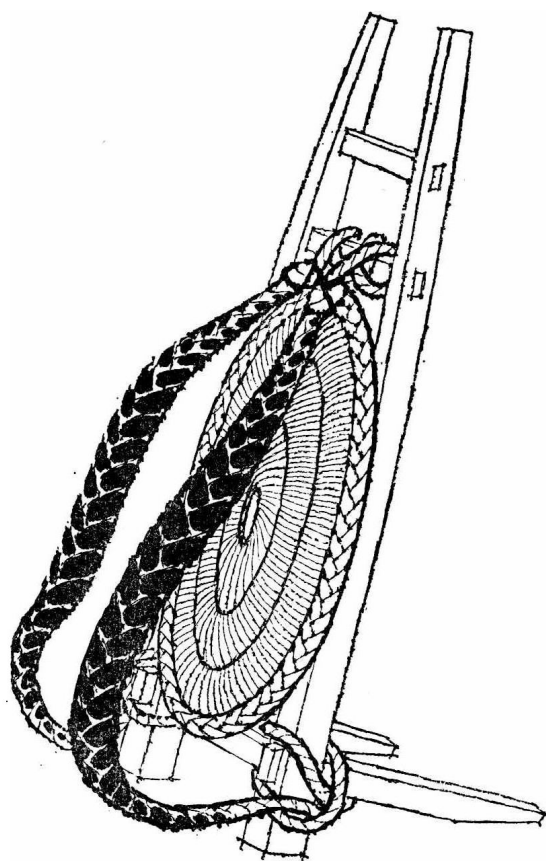
画家・^{たかはしくにとし}高橋 国利

1909年，高知県に生まれる。広島市立段原小学校卒。中国新聞，森下仁丹，わかもと製菓等で商業デザインを担当，終戦後は童画に専念する。現住所／東京都板橋区小豆沢 2－31－1－129

炭^{すみ}
焼^や
き
の
辰^{たつ}

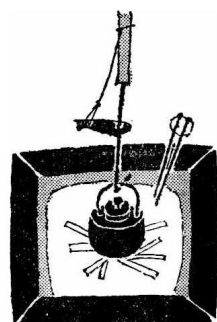
岸

武雄



いろいろの火

へはじめに



おまえらは、うちのたか坊とおんなじ五年生じゃそうやのう。なに、彦太郎にミヤ、するとおまえらはいとこ同士で、彦之進のまごにあたるわけじゃな。そうか、そうか。とにかく、ようきてくれた。

わしも、いよいよあさつての十二月二十日には、この青山の村を出ていかんならん。わしばかりじゃない、かかのおふさに、よめのみつ子、それからまごのたかしとツネ、つまりうちじゅうがひっこしていくのじゃ。

この寒空になにごとじゃとか、せめて正月は村でむかえてからにせよとか、村の衆はいろいろいうてくれるが、むすこの清太が、町でうちをみつけてのう。「お父った、はよ出てござれ」と、矢のさいそくじゃ。

なにしろ、うちがのうて、もうかれこれ一年ちかくも、清太は町でひとりぐらしをしとる。よめや子どもの顔が見とうなるのも、むりはないわい。

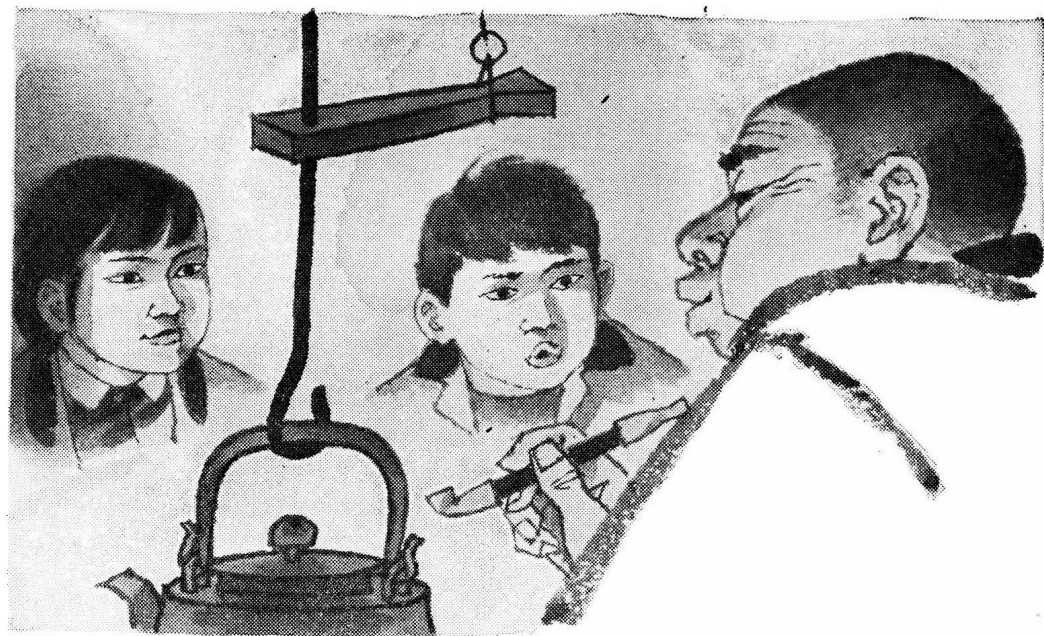
町まちというのは、岐阜ぎふのちかくの大台原市おのだいはらし、ほれ、ゆうめいな飛行場ひこうじょうのあるところだな。清太きよたは、その町まちの飛行機ひこうきづくりの工場こうばへ、つとめ口ぐちがみつかったのう。このごろでは、ベトナムできずついたアメリカの飛行機ひこうきのしゅうぜんをしとるげな。

わしや、そんな仕事しごとは、ほんのとは氣きにいらん。そのわけは、おいおいわしの話をはなしきいてもらえば、なっとくしてもらえとおもうが、このあいだもわしや手紙てがみに、『テレビで、ベトナム人じんのようすを見たが、おれんた日本人にほんじんそっくりの顔かおしとる。やせっぽちの目めばっかギョロギョロしとる子どもを、母親ははおやらしい女おんながだいとる写真しやしんを見て、わしや、なみだがこぼれた。おまえは、そんな人ひとたちにばくだんをおとす、アメリカの手てだすけをしとるんか。むごいとおもわんのか。』と、書いてやったらな。

『お父とった、いまの時勢じせいに一家五人いっか 五人くうていくからには、そんなぜいたくはいつておれん。すこしでもぜにどりのええ職しよくにつかんならん。しんぼして、はよ出でてござれ。』と、いつてよこした。

わしは、自分じぶんの考えかんががぜいたくとはおもわんが、あととりむすこの清太きよたからそういわれると、なんともいえんようになってのう、しぶしぶでかけることにしたのじや。

また、清太きよたがやっと思みつけたうちというのが、アパートとかいう、はこのような家いえ



でのう。へやかずは、たったのふたつと
 かいう話や。しかも三階じゃとよ。おふ
 さは、これがいちばん苦になるらしゅう
 てな。この年で、えっこらさ、えっこら
 さと、まい日、階段をあがりおりしんな
 らんのかえと、ぐちばっかこぼしとる。
 つつく畑もないとこで、わしや日々、な
 にしてくらせばええんじやと、なきごと
 ばっかいうとる。

ま、こういう年よりのぐちをきかせた
 ところで、しかたがないのう。

とにかく、このすみなれた家におるの
 も、もうあと二日。

わしがおぼえがあるときからでも、か
 れこれ六十年。ほれ、この黒びかりする
 天じょうや板戸を見てくれよ。ようあき

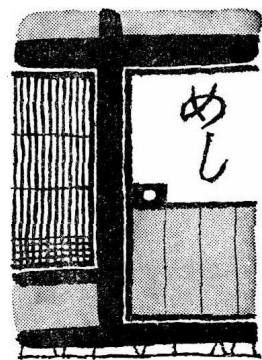
もせず、このいろいろのけむりでいぶしたもんじゃのう、は、は、は……。

いろいろといえ、こんなもんをのこして、まい日うちんなかをいぶしとるのは、村でも、もうわしのうちだけじゃのう。村の衆は、わしをがんこおやじのようにいうとるらしいが、あながち意地をはっておるのではない。やわやわとほだ火がもえて、むかいあつておるものの顔が、ぽうつと赤うなる。こまかい灰が、粉雪のようにあたまにかかる。

わしや、これがなんともいえんすきでう。いろいろにむかいあつておると、心がなごみ、人がなつかしゅうなつてきてな。おまえらふたりも、そこにすわっとるたかしやツネと、おんなじまごのように、かわええ気持ちになるのよ。

ところで、おまえらは、わしという炭焼き男の一生の話をききとて、わざわざたずねてくれたのやそうな。こんな無学な、おまけにびんぼな山男の話を、なんのためにききにきたのか、わしやしらんが、せっかくのたのみじゃ、ぽつぽつはなすとしよう。いっこうにうだつのあがらん一生やったが、ま、いっしょうけんめいまじめにはたらいてきたことだけは、じまんでけるかもしれんどのう。

一、コブシの花



わしはいま六十八。明治三十六年、つまり日露戦争の前年に生まれたわけじや。

おまえらのような年ごろには、もうお父ったのしりについて炭山へいき、十五、六のころには、けっこう一人前の炭焼き男になっておった。

米そうどうが日本のあちこちにおきたのは、たしか大正七年じゃったのう。米が高くなつて、一升めしをくうといわれたわしら炭焼きは、弁当のめしにこまり、くさい南京米をめんばにつめて、山へいったことをおぼえとる。

あのころが、わしの炭焼きのはじめじやから、かれこれ五十年ちかくも、炭を焼いていたことになる。さつき、いろりをながいあいだくすべとおした話をしたが、それとおんなじように、かまを焼きつづけたわけじや。

考えてみりや、よっぽと能なしというか、しんぼづよいというか、ともかくおかしな男よ。は、は、は……。

ところで、どういうつもりで炭^{すみ}焼^やきになったのか、わしの氣持^{きもち}ちをまずはなさになるまいが、ひと口^{くち}にいや、わしらのようなびん^{にん}ぼ^ぼ人が、この青山^{あおやま}でくらししていくには、これよりほかに道^{みち}がなかったからじゃ。

坊^ぼん達^た(ほっちゃんたち)もわかつとるように、この青山^{あおやま}という村^{むら}は、四方^{しほう}を山^{やま}でかこまれ、まるで、すりばちのそこのようなところ。そこへ、みんなしがみついたりわけじゃ。

百^{ひやく}八十^{じゅう}けんも家^{いえ}があるというのに、田^たんぼは、山^{やま}田^だをあわせても、四十^{しじゅう}町^{ちやう}歩^ふ(二^に町^{ちやう}歩^ふはおよそ一^{いっ}ヘク^へタール)くらいかのう。それもむかしは、おだいじん衆^{しゆ}がしめとって、わしらは、なかなかつくらせてもらえなんだ。また、たとえ小^こ作^{さく}することができたとしても、年貢^{ねんぐ}にはんぶん以上^{いじやう}とられて、手^てにのこるのはわずかなもの。いきおい、山^{やま}でくっていくよりしかたがないわけじゃ。

山^{やま}といや、この障子^{しょうじ}をあけてみりやわかるように、ふもとから尾根^{おね}まで、みごとに杉林^{すぎばやし}がつづいとる。たいしたもんじゃと、よその衆^{しゆ}はかんしんするが、あれはずうつと五兵衛^{ごへえ}ひとりの持^もち山^{やま}なのさ。いまでは、上木^{うわき}だけでもなん千万^{ぜんまんえん}円という値^ねがするやろのう。五兵衛^{ごへえ}に八蔵^{はちぞう}、音松^{おとまつ}に幸助^{こうすけ}、儀三郎^{ぎざぶろう}に信吾^{しんご}と、ほんのゆびをおればたりるほどの連中^{れんちゆう}が、青山^{あおやま}のええところをしめとるわけじゃ。

わしらびんぼ人は、そのおくの高いところにある雑木山を、それも山主から借りて、炭を焼くわけさ。そやから、山から炭をおねだし（せおってだし）、倉庫におさめたときは、えろう金（かね）がもうかったような気がするが、そこから、山代（やまだい）をはらい、たわら代（たらい）やなわ代（なわだい）を引き、いろいろ前借り（まえがかり）しておったものを引くとなると、あとにはほとんどなにものこりやせん。

わしのかかのおふさも、手（て）をかさかさにして夜昼（よるひる）はたらいてくれたが、勘定（かんじよう）してみりや、日当（にっとう）も出てこやせん。

しやけど、五十年（ごねん）ものあいだ、わしが炭焼（すみや）をつづけられたのは、ほかに能（のう）がなかったこともあるが、よう考（かん）えてみると、おふさがわしをいつもたすけてくれたおかげじや。

おふさといや、おもしろい話（はなし）がある。

おふさは、わしが「しきびとうげ」の雪道（ゆきみち）でひろった女（おなこ）なのじゃ。うそじゃない、ほんとのことよ。

まず、その話（はなし）からはじめようかのう。

あれは、わしが二十歳（はたち）の冬（ふゆ）。

わしは、五里（一里はおよそ四キロメートル）もある掛斐の町へ買いものにてかけ、ちやつと用事をすますと、すぐひきかえした。雪道のことやし、あかるいうちに村へつこうと、走るように歩いた。

乙原をすぎ、「しきびとうげ」へさしかかると、空がにわかには暗うなり、雪が風にまじってふりだした。

「えらいこっちゃ、まだ青山へは、三里もあるし……」

わしや、おもわずひとりごとをいうと、用意してきたマントをつけ、いちだんと足をはやめた。からだをななめにかたむけ、足もとに氣いつけながら、ほそい雪道をたどっておると、ふとへんなものを見つけたのじや。

雪道にだれかが、こしをおろしたようなあとがついており、しかも、そこだけぼうつと赤うなつとる。おかしいこともあるもんやと、首をひねりながらしばらくいくと、また、ぼうつとした赤いあと……。

こうして、わしはとうとう、雪道にたおれておる、ひとりのむすめを見つけたのじや。むすめは、赤いこしまきから白いはぎ（ひざから下のところ）をむきだしにしたまま、雪のなかにうつぶせになっておった。

ぼうつと雪が赤うなつておったのは、このこしまきの色が、雪にしみついたのじやっ

た。そのころ山^{やま}のむすめはのう、小^{しょう}学^{がく}校^{こう}を出^でると、たいていの子^こは、町^{まち}の紡^{ぼう}績^{せき}工^{こう}場^ばへ糸^{いと}ひきむすめにでかけたものじゃ。

このむすめも、正^{しょう}月^{がつ}になつたので、うちへのみやげの信^{しん}玄^{げん}袋^{ぶくろ}をせなかに、ここまで歩^{ある}いてきたものの、吹^ふ雪^{ゆき}におうてゆきだおれたものとみえる。

「おお、こりや、むごいこつちや。」

わしや、むすめのかたに手^てをかけて引^ひきおこしたが、ぐったりとして目^めをはんぶんつぶっとる。えろう顔^{かお}の白^{しろ}い子^こじゃと、のぞきこんでみたが、村^{むら}のむすめではない。

「こりや、ともかく津^つ汲^{くみ}の村^{むら}までつれていかな死^しんでしまうわい。」

と、わしはちよつとはずかしい気^きもしたが、むすめをせなかへ引^ひっかつぎ、信^{しん}玄^{げん}袋^{ぶくろ}を手^てにぶらさげた。

い、う、ねのない人^{にん}間^{げん}をおんでみると、おもたいもんでのう。わしや、一^り里^りの雪^{ゆき}道^{みち}をはうようにして、やっと津^つ汲^{くみ}の村^{むら}へたどりついた。

いちぜんめし屋^やの川^{かわ}瀬^せ屋^やへついてはっとすると、店^{みせ}のばばさが、

「おお、むごいこつちや。こりやもうすぐごえ死^じぬわい、火^ひにあたらせちや、かえつてわるいぞ。毛^{もう}布^ふでつつんで、からだをこするのじゃ。」

と、毛^{もう}布^ふをかしてくれた。